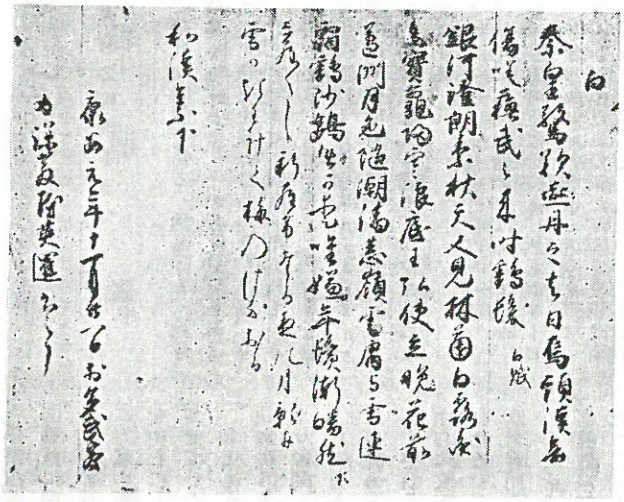
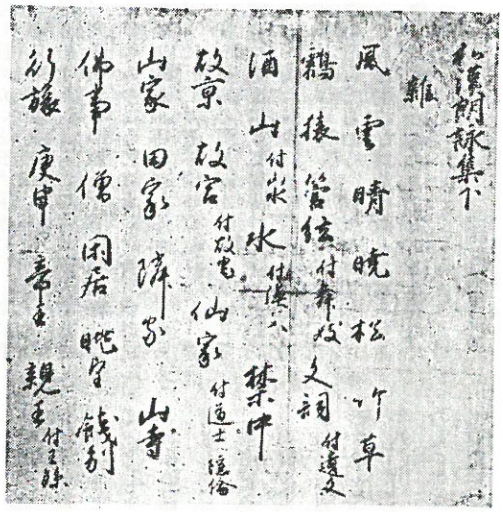
図書館ニュース

No. 4
1967
42・5・10・発行
発行人 園田 義道

発行所　東京都文京区白山5丁目28番の20号　東洋大学附属図書館





康安三年本　和漢朗詠集　巻頭(右)・巻末(左)

中島徳蔵文庫

常務理事　勝　承　夫

捕風中島先生といえば、戦前の東洋大学卒業生なら知らぬ者はなかろう。東洋大学の主のような人である。昭和十五年六月二日当時の大倉邦彦学長は、大講堂で大学葬をもって先生の逝去を弔らわれた。

爾来二十有七年、先生の二女桜さんが守って来られた先生の蔵書全部が寄贈されて、このたび大学図書館に移された。西片町の「唯我堂」の額のかかっている玄関をあがると、右に曲って、暗い廊下を通って突き当りに先生の書斉があった。その暗い廊下というのが書庫と壁にはさまれた処で、とにかく尨大な書籍であった。なつかしい書庫である。

いずれ新しい図書館も建てられる予定だから、中島先生文庫として、本学に永く伝えることができよう。後学に資すること大なるとともに、校友諸氏にもなつかしいものとなろう。

先生と本学との関係を考えると、哲学館事件が何よりも大きい。明治三十五年、当時、哲学館有志が金六十二円七十銭を醵金して、見舞金として贈った。先生はその金員をもって、倫理洋書十六冊を購入し、哲学館図書館に寄贈して、全学生を鼓舞されたという。

本学図書館と先生との関係は六十有余年に遡る因縁といえよう。感無量である。

今回の寄贈の書籍は四千冊を上まわる数で、この中には百冊にのぼる佩文韻府、資治通鑑、皇清経解のほか、江戸時代の儒者の著述もあり、東西の貴重な文献が多く、何れ委員をあげて整理に当ることになると思う。

新図書館の建設について

岩間　巌

私大の開設拡張ブームに乗って一度認可されてしまえば、教員の半数が逃げだした実例さえある今日この頃、東洋大学では専任兼任の全教授陣が定着しており、その給与水準も殊に若年層においては一流並に高い。

事務職員の対学生並びに対教員の比率が、知ってる限りでは最高であるにも拘らず、簡易ワークサンプリングの結果、意外にもそのモラールは高い。漸進的に事務の標準化と機械化を企て、且つ自然減の補充を差し控えることができるなら、企画と窓口サービスの向上を計りつつ、負担を漸減することも決して不可能ではあるまい。

大学は先づ人であり、その処遇であるとするなら、このことは基本的には誠に結構なことと云えよう。

ところが、中心校地や施設、殊に中央図書館となると、甚だお寒むい限りである。前者は定められた最低基準にさゑ遙かに及ばず、これが今後の拡充認可の桎梏となっているが、隣接地の併合のため払われている最近の努力は認めなければなるまい。後者の蔵書は、新設大学の到底及びもつかぬ程に、特に古典ものが充実しているが、経営学関連の一部では個人の書架にも及ばぬものが無いではない。学生の図書館利用率の低下は、ひとり本学のみの現象ではないが、これこそ真に深刻な問題である。然し乍ら、建学の精神からすると、その自主的学習によって深く識見を養わしむべきであり、幸にして本学ではゼミ制度が布かれていることではあり、これを通じて閲覧率を格段に引き上げる方法は考えられるが、一万五千の学生に対してそんな策に出でたなら、閲覧室は文字通りパンクすること必定である。

このスタッフと施設のアンバランスは、如何にも極端過ぎではあるまいか。

私学経営の危機を控え、然もクリーピングインフレの避け難たい事情の下で、図書館新設のための新たな固定投資は極力差し控えたいと云う見解には、誠に首肯されるものがあるが、さりとて、次の周期まで十年近くもこの儘放置できるとは、到底判断しかねる。私学経営難は孤り本学のみのことではないので、当然大幅な国庫助成が待望される理であろうが、これとて総選挙用の宣伝はさて措き、保守政権の限界があろう。既に入学者家庭の職業構成に特異性が兆われ始めているので、特別入学や授業科値上の限界も遠くはあるまい。要するに私は、前段に暗示してる如く、稍ゝホロ苦味くはあっても自主的な対策に敢えて踏み切るべき秋に到ったものと思わざるを得ないのである。

（経営学部長）

図書館予算と運営について

山下　忠孝

分館図書運営委員を命ぜられて半月、図書館に関して何でもよいから書けとの分館長の注文である。事情の判らぬままに、私の所属する応用化学科のことなどを中心にして、希望やら苦情やらを述べさせていただきたい。

私どもが何か新しい研究を始めようとするとき、そのテーマに関し、今までにどのようなことが、どのような方法で研究され、どのような結果がだされたかを欧米専門誌を中心に文献調査することから初める。したがって私どもの欧米専門誌に依存する所はきわめて大きい。幸にして工学部設立当初の準備委員の先生方のご努力により、応用化学科の定期刊行物は洋雑誌四五種、和雑誌五〇種にのぼり、私立大学としては恵まれすぎていたようである。このごろの日本の諸物価の値上りは大変なものだが、欧米とて事情は同じとみえ、洋雑誌の値上り率は平均年一〇%に達している。一方学科の図書予算は（大学院設置用は除く）三六年一二〇万、三七年一二〇万、三八年八〇万、三九年七四万、四一年九三万とむしろ年々減少の傾向にあり、したがって前記和洋専門雑誌費の全予算に対し占める割合は年々増加し、四一年には一〇〇%をこえるに至った。本年度私どもは涙をのんで洋雑誌一三、和雑誌一八の削減を行はざるをえなかった。工学部内他学科の事情もほゞ同様であろう。今後最小限値上り率に見合った予算増加が認められなければ、私どもは毎年何種類かの専門雑誌をとりやめねばならないことになる。

化学系の全雑誌数はおそらく何百といった数になると予想されるし、それらを一大学、一学科の予算でまかないきれないのは当然であろう。

私の研究室の昨年の文献複写費は約四万円で、そのうち国会図書館その他外部への依頼は五〇%を占めた。文献集蒐に費やす時間と費用は馬鹿にならない。だからいくつかの大学、研究所図書館間の情報交換を密にして、有無相補って、迅速に、廉価に希望文献の複写交換ができるような体制を図書館として真剣に検討してほしいものである。

（工学部教授）

図書購入予算決まる

去る三月二十三日の図書館運営委員会において、三つの議案が審議され夫々次の通り決定した。

第一議案の昭和四十二年度図書購入予算については、要求予算より大幅の減少であり、その配分方法にも問題点がある、との意見があったが、来年度は大学院の図書購入予算を別途考慮することを条件に、別表の通り決まった。

第二議案の図書館外貸出しについては、現行規程によると、教員一人十五冊三ヶ月の館外貸出しが認められているが、利用者の要求もあり、これを大幅にゆるめるか、又、別に研究室単位の特別貸出し規程を作る必要があるかとの意見交換がなされたが、現行規程の変更や、特別貸出し規程を作ることは、管理、運用、並びに利用の各方面に障害があり困難であるとの結論的見解から、将来の希望的意見として、新図書館建築に際しては十分教員側利用者の便を計るよう配慮してもらいたいとの要請がでた。

第三議案のゼロックス使用については、現在の一コピー三十円の使用料金を値下げするかについて、昨年九月からのゼロックス利用状況を検討したところ、文献の複写よりも学生の試験期におけるノートの複写の方が多く、ゼロックスの借用料金の半額以上がそれにより賄われている状態が判明した。ノート複写については学生の教育上、問題があり、中止させるか検討の必要はあるが、先づ文献の複写で採算が取れる様に再度PRし、今年の九月までの利用状況を見た上で、再検討することを決定した。

図書課長　望月武夫

昭和42年度図書予算
（単位千）

総　額	41,050
（内　訳）	
雑誌及び継続叢書	2,900
文学部	1,000
経済学部	1,000
社会学部	1,000
法学部	1,000
経営学部	1,000
教養課程	1,000
大学院（全体）	1,000
短期大学	1,000
図書館	4,400
重松文庫	2,250
助成金	4,000
充足費	8,000
工学部	8,500
予備費	3,000

（注）
1．充足費の内訳
史学科……4,000
教育学科……1,000
経営学部……3,000
1．雑誌及び継続叢書は従来購入中の全学部分（但し工学部は除く）
1．この予算は3月31日に正式に決定をみた。

図書館の動き

ゼロックスをご利用下さい

第二閲覧室でゼロックスの複写サービスをしております。

二、三枚のコピーなら殆ど待たずにできあがります。

大学院設置準備を終えて

米山大恵

工学研究科修士課程、博士課程増設に関して、文部省の実地審査が、今春二月二十三日、工学部で行われた。分館では、この為の準備を、昨年三月からはじめ、図書等の選定を、各学科選択委員の先生方に御願いした。

特別予算として、七月に、図書費・製本費・什器消耗品費、臨時人件費合せて千五十一万五千円を要求し、直ちに決裁になった。この結果、四十一年度図書費は、千七百万円、印刷製本費百四十八万円となったが、土木・建築関係の図書及びバックナンバーに、その大半が使用された。特に、土木・建築関係のバックナンバーの一部は、十九世紀代のものまで溯って探したが、第二次大戦中にヨーロッパで戦火の為焼失してしまったものや、紙の不足から出版部数が少なかったなどで、入手不能のものがあり、今回はバックナンバーにずいぶん悩まされた。

千七百万円の図書整理の為に、アルバイト数名を置き、発注した図書が大量に入荷した昨年十月から今年一月の間は、本館の特別協力を得て、約五千冊の図書を受入整理し、予算と能力の許容限度までの作業を行って当日を迎へた。

審査員は、東京工大図書館長久保氏、早大教授米屋氏、時子山氏、立大教授小林氏、文部事務官原田氏の五名。図書館では、平野分館長、望月図書課長、私が案内説明を行った。分館の蔵書は、図書二万九千冊、継続購入雑誌四百七十種と、文部省の最底規程には達しているのだが、何分にも、教室を使用した間借り図書館の悲しさで、持てる資料を一室に収容しきれず、書庫、開架室、参考室、各学科研究室に分散配置しているので、一見して貧弱の印象を与へたようである。

審査員から、いろいろと質問があり、特に時子山氏は、書架用カードと図書受入原簿を点検する、といった入念さであった。

こうして一年近くを要して準備した審査は終り、図書館に関して、いくつかの注文をつけられたが、工学研究科は無事認可となった。文部省の注文を満し、研究用図書館としての形態と実質をもつた図書館とする為には、機能的な図書館を新築し、工学部の全資料（新刊雑誌を含む）を集中管理し、購入予算と館員を大増強しなければならないと考へる。

（分館員）

貴重書から

康安三年本 和漢朗詠集解説（表紙写真版解説）

平安時代中期、文芸の興隆とともに詩歌の朗唱吟詠も盛行し、その朗詠のためのテキストとして和漢の詩句や和歌を撰集して成ったのが、藤原公任の撰と伝えられる和漢朗詠集二巻である。上巻はいわば季節の部で、これに関係ある詩歌を春夏秋冬に類別し、立春に始まり仏名に終る合計五九の題目に配する。下巻は雑の部で、風に始まり白に終る四八の題目をおおよそ天象・植物・動物・術芸・地儀・居所・仏事・人事・人倫・人情の順序に配し、それぞれに関係ある詩歌を収める。集成ってより後、広く人々に愛誦されて世間に流行し、後代の文学に与えた影響も大きい。それはまた、漢字と仮名と二体系の文字を具備しているところから、習字用の手本として豪奢な料紙に流麗な筆蹟で書写が重ねられた。遺存する古鈔本にも著名な書家の名を冠したものが極めて多い。本学図書館所蔵の一本は、縦二九・三センチ、横一二・〇センチの折本二帖、元来は巻子本であったらしい。濃紺地に鵬・花弁文様をあしらった金襴表紙、見返しは鳥の子紙で、金銀の切箔を散らす。この集は、古くいろいろに呼ばれ、現存諸本にも「和（倭）漢朗詠抄」「和（倭）漢抄」「和漢朗詠」「朗詠集」「朗詠抄」等、種々の称呼を見るが、本書には、首題に「和漢朗詠集」、「尾題」に「和漢集」とあり、殊にその尾題の称呼は珍しい。書写が何人の手に係かるかは不詳であるが、上・下巻とも奥に「康安元年十一月廿一日於多武峯為深教房英運書写之了」とあり、康安三年（一三六一）の書写に係かるものであることが知られる。本文は、斐楮混漉の料紙、長さ五〇・二センチのものを、上巻二九枚、下巻三三枚継ぎ合わせ、見開きに漢詩で八行、和歌で一六行を書写する。所収詩歌は、漢詩五八八句、和歌二一七首。この集には博士家諸家の訓法が伝えられ、現存諸本の中にも加点資料も多いのであるが、本書には訓点はない。その本文の系統を検するに、まず、御物粘葉本・関戸本・御物雲紙本・伝寂然筆本の類に欠け、鎌倉期以降の追補と見るべき諸句のこの書に存しない点から、この書が御物粘葉本以下の古鈔本に近い姿を有するものであることを知る。ただし、伝公任筆太田切・益田切、延慶本、伝世尊寺行尹筆本、嘉暦本に見える「よにふれば」などの和歌がこの書にも存するところから、なお追補の行なわれた形跡も窺える。平安時代に書写されたこの集の諸本は、通例、㈠御物粘葉本系統、㈡関戸本系統、㈢雑類の三群に分類されるが、本書は、㈠に存し㈡に見えない漢詩一一句・和歌三首、㈠に見えず㈡に存する漢詩一句という所収詩歌の出入状況からして、御物粘葉本の系統に属するものと推測される。果して然らば、その系統の完本として高く評価されよう。

（付記）稿を成すに際して種々御教示を賜わった吉田幸一博士に厚く謝意を表する。

文学部講師
峰岸明

ほん

〔稀覯本〕

きこうぼん。稀書、貴重本、古刊本、奇書、珍書などの総称であるが、特に内容がすぐれているとか、妙味があるとか、更に装本美の備わっている書物をいう。新聞広告などに、「稀覯本」と書いてあるのを見るが、この稀覯という熟語は漢語には見当らない。中国の古典には、例えば「稀覯之物也」というふうに稀覯と出ている。「覯」は「見る」であり、「覯」は「思いがけず会う」という意味である。

〔古書〕

こしょ。俗な言葉でいえば「古本」（ふるほん）だが、「古書」という場合には、文献的価値のほかに、稀本的、骨董的価値のある場合を指す。「古本」といえば、玉石混淆十把一束で、クズ本もあるが、時には古書の掘出し物も現われる。東京の「古書籍商業組合」に加盟している古本店は約八五〇軒。このうち神田にはその八分の一が密集している。全国では約二、五〇〇軒。大阪の活動も目覚ましく「古書会館」の設立を見た。

この方面の消息を伝えるものに、東京には「月刊・日本古書通信」大阪には「大阪古書月報」がある。また、独得の地盤に立って活躍しているのは京都の書肆思文閣である。

図書館刊行物案内

図書館のサービス活動やPR活動を充実させ発展させる目的で本学図書館でも各種の刊行物を発行しております。これらは図書館と利用者との橋渡しを円滑に行い図書館の本質的な姿を知っていただくために必要欠くべからざるものですが、ここでは主要なもののみ紹介して皆様の御参考に供したいと思います。

一、図書館利用の栞

発行人　園田義道　年刊(四月)　六千部　19cm　16P

図書館利用者のために最低限必要な知識、例えば目録の引き方や閲覧室の所在について、又複写サービスの求め方や館外貸出の手続き方法及び館内閲覧規則、参考室、雑誌室の利用方法等図書館利用の実際について詳細に解説し合せて図書館サービス及びPRの一助とするものです。

一、哲学堂図書館図書目録

井上円了先生編集　大正五年発行　20cm　148P

井上円了先生が三十年間に亘って私財をもって購入された数万の蔵書のうちから特に明治維新前の図書類(和漢古書)を選んだもので、総計百四類、六千七百九十二種、四万一千五百八十五巻、二万一千百九十三冊に及ぶ図書が収録されています。

一、図書館ニュース

発行人　園田義道

千部　年四回(一九六六年六月一日創刊)　26cm　8P

現在四枚八頁のパンフレットに本の紹介、利用者案内、図書館の動き、仕事等を盛りこんでいますが、図書館と利用者とのコミュニケーションの円滑化をはかり、広く学内関係の皆さん方へPRを行うものです。

一、増加図書目録

26cm　5冊

年度別のものと速報版(月別)のものとがあります。年度別のものでは昭和二十七年に第1号が出て以来現在第5号まで、近く第6号が出る予定。

速報版は昭和三十九年より始められ、現在輪転機によって、ワラ判紙に印刷し配布している。いづれも各年度及び各月度に整理を終った和漢書及び洋書を収録したものです。

一、購入雑誌目録

年刊三百部(昭和四十一年度より)　25cm　26P

各年度において図書館及び本学研究室用として継続購入される雑誌の目録です。

一、貴重図書リスト

これは定期刊行物ではないが、書庫の一隅に収められている一二巻、八四冊、四三帖の貴重書及び一六三冊、一〇帖の準貴重書のリストです。

一、寄贈雑誌目録(学術関係)

これも定期刊行物ではない。

各大学より寄贈を受けた紀要・論文集・学報・報告等の目録です。

以上図書館刊行物の内から主なものを簡単に紹介してきましたが、利用者へのサービスをより充実させ強化していくために、今後とも利用者本位の刊行物を企画し発行して行く予定です。

以上

(参考係)

明治百年関係文献

原奎一郎編　原敬日記　福村出版
明治文学全集　筑摩書房
笠信太郎編　日本の百年　社会思想社
木下宗一著　日本百年の記録　人物往来社
林房雄著　緑の日本列島　文芸春秋社
大河内一男他編　近代日本を創った百人　毎日新聞社
大隈秀夫著　明治百年の政治家—伊藤博文から佐藤栄作まで　潮出版社
大田俊穂著　血の維新史の影に　大和書房
大田俊穂著　維新留魂録　大和書房
黒田清輝日記　中央公論社
正木直彦・日記　十三松堂
丹波恒夫著　錦絵に見る明治天皇と明治時代　朝日新聞社
史料明治百年　朝日新聞社
有沢広巳編　日本産業百年史　日本経済新聞社

四二・二・二六付毎日新聞より、抜萃

大学図書館と研究室

船木勝馬

大学が研究と教育の場であるかぎり、大学図書館と研究室とがその中心であることはいうまでもない。本学の図書館はこの数年間に優秀なスタッフによって近代化され、研究室も備品がととのえられつつあるが、十年のあまり図書館と研究室との関係をみつめてきたわたくしの率直な感想は、両者がうまくかみあわず、あるときにはおたがいに不信感をいだく場合もあったということである。その原因はいろいろあるだろうが、大学の近代化の重要な課題のひとつとして、両者の間によこたわる問題をひとつひとつときほぐしていく努力をしたいものである。

図書館のしごとの一つにレファレンスがあるが、それに必要な資料が完備されていることは望ましいことであり、また研究室に教員の研究に欠かせない資料を常置しておくとともに、学生に対してより専門的なレファレンスができるような資料をそなえておくことも忘れてはならない。こういう点からみると、研究室は中央図書館と密接に結びついた分館的役割を負わされているといえよう。ところが現在の本学の研究室は、現行の個人貸出の規定だけではその機能を十分に果すことが不可能なようである。さらにいまの段階で図書館と研究室とが有機的につながるためには、図書館側には学内にある図書の総目録の刊行、増加目録（現行のものより利用しやすい体裁の）の作成、分類カードの整備などの問題があり、研究室側には図書の管理・運用の問題があるように思われる。

研究者はできるかぎり文献を手もとにおきたがる傾向があり、図書館人には本を図書館に集中すべきであるという考え方が支配的であることは否定できない。こうした矛盾をのりこえて、大学にあるすべての図書を活用する方法はないだろうか。図書館が本を死蔵する倉庫と化してはならないし、研究室が教員のいこいの場所に終始してはならないと思う。各学部・学科によって事情がちがうであろうが、運営委員会でのご検討を期待したい。

（文学部教授）

工学部分館の現状

大山恵米

工学部分館は開館以来六年になる。発足当時は、蔵書数約五千冊、職員も二名という小さなものであったが、年々収書につとめ、現在は、約三万冊の図書と、五百種の学術雑誌を所蔵している。

分館は、工学部の教員学生を奉仕の主対象としているので、自然科学関係書を中心に集められており、土木、建築関係の外国雑誌には十九世紀のものも含まれている。

急速な、科学の進歩について、その最新のニューズを知る為に、学術雑誌に頼るのは勿論であるが、大量に出版される世界各国の雑誌全部に、目を通すことは不可能である。ここで登場するのが、情報提供専門誌である。分館も、この種のものを、何種類か備へているが、都心から遠く離れ、附近に類縁機関のない分館の、奉仕向上の為にも、情報検索専門誌の整備を計画中である。

昔の学生に比して、今の学生は教養の為の読書をしないと云はれるが、頭の栄養失調は、体のそれと同じに恐ろしい。

幸に、四十一年度は、教養関係図書の為に、特別予算が計上され、人文科学系、社会科学系、合せて千九百冊を購入し、整理も終って書架に並べられている。この中には、古今東西の、思想家や宗教家の著作も、多数含まれ、又、教職関係・美術関係の図書も沢山あるので、学生諸君は、無駄の効用ということを思い、利用の多からん事を願う次第です。

専門教育関係では、工学研究科増設の為、洋書に重点を置いて集めたが、学生用としては、経営工学的なものを中心に集めた。土木・建築関係の図書も、この一年間に、約三千冊登録されたが、他学科に比べると未だ少ないので、今後も一層充実に努める必要がある。

雑誌の合冊製本も、百五十万円の予算で、約二千冊ほど、仕上った。これにより、紛失と破損が防止され、利用者への奉仕は迅速・正確となった。

このように、この一年で分館資料は、ずいぶんと増加し、ゼロックス等による複写奉仕設備もあるのだが、人員が不充分なので、利用者から、サービスの悪い分館との声もきこえるのは誠に残念である。

（分館員）

四部分類と日本十進分類法(N. D. C.)との比較

東洋大学図書館においては，すべての図書を日本十進分類法によって分類している。

漢籍の分類は隋書の経籍志以来経史子集の四部に分類するのが普通である。これを，N. D. C. で分類した場合それぞれの主題に分散して，四部分類のみを御存じの向きには或いは理解しにくい所もあるかと思われる。

そこで，貧しい図書整理の知識と経験とをたよりに，四庫全書総目（提要）の分類をあげそれに相当する N. D. C. 番号に当てはめてみたのが次に掲げる表である。

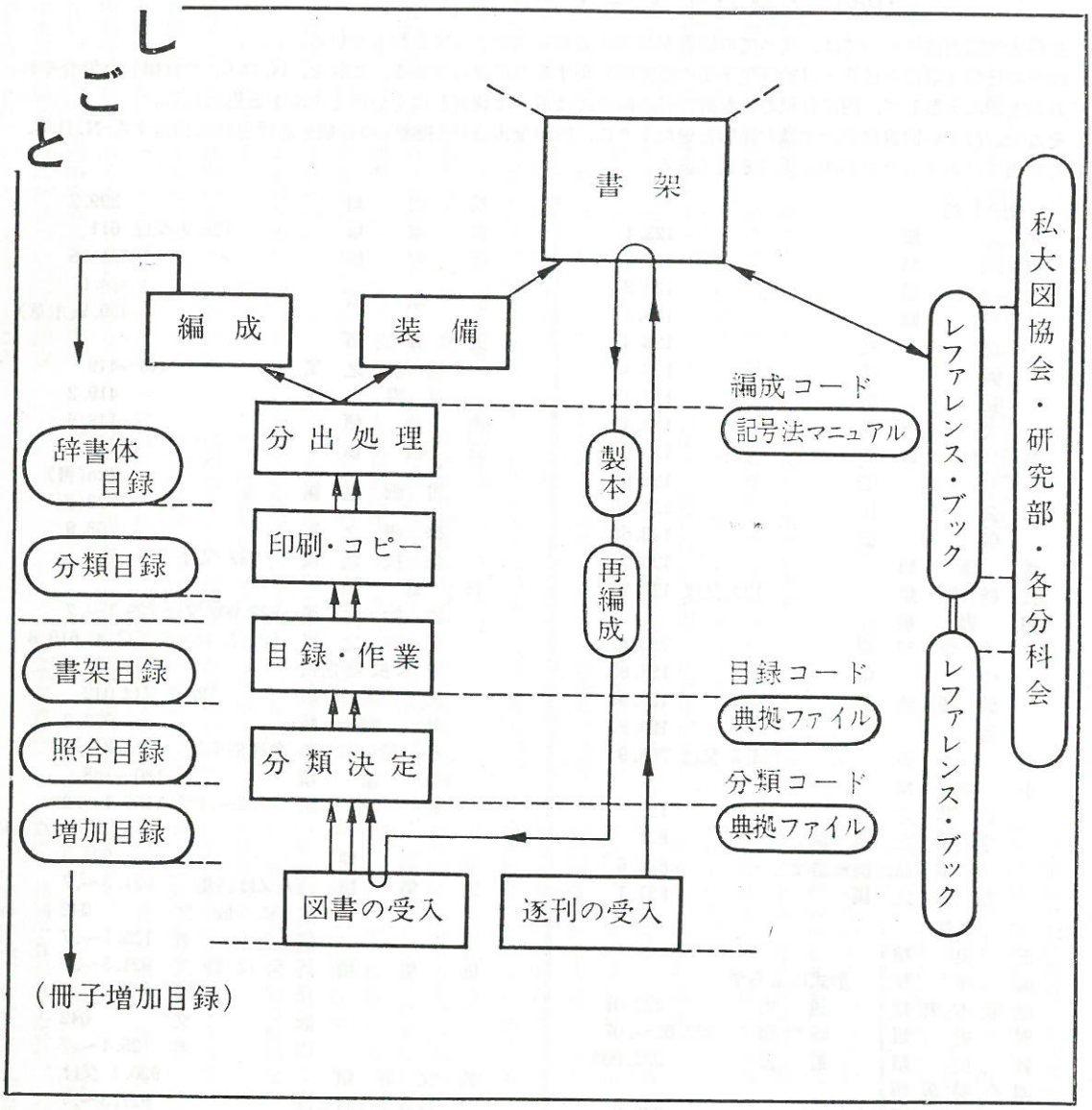
経部		
易類		123.1
書類		123.2
詩類		123.3
礼類		123.4
周礼		123.41
儀礼		123.42
礼記		123.43
大戴礼		123.45
春秋類		123.6
左氏伝		123.65
公羊伝		123.66
穀梁伝		123.68
孝経類		123.7
五経総類		123 又は 123.08
四書類		
大学・学庸		123.81
中庸		123.82
論語・論孟		123.83
孟子		123.84
楽類		128.5 又は 768.9
小学類		
訓話之属		123
字書之属（説文）		821
蒙古語，満洲語など		829.6
韻書之属		821.1
史部		
正史類	形式によらず	
編年類	形式によらず	
紀事本末類	形式によらず	
別史類	通史	222.01
雑史類	時代順	222.02～.07
詔令奏議類	叢書	222.008
伝記類（原則として）		282.2
儒者		12口
詩人		921
歴史家		222 又は 201.22
史鈔類		222.01～07
載記類		222.01～07
時令類		222.01～07
地理類		292.2 又は 290
職官類		222.01～07
政書類		222.01～07
邦計之属		222.01～07
軍政之属		222.01～07
法令之属		322.22
目録類		020～029
史評類		222.004 又は 222.01～07
子部		
儒家類		124 又は 125
兵家類		399.2
農家類		128.9 又は 611
法家類		128.1～6
医家類		490.9
		499.9(本草)
天文算法類		
推歩之属		440～449
算書之属		419.2
術数類		148.6
芸術類		
		728(書)
書画之属		722(画)
琴譜之属		768.9
雑技之属		739 又は 795～796
譜録類		
器物之属		222.002 又は 729.1～.7
飲饌之属		596.7, 588.5, 617.4, 619.8
草木虫魚之属		470～489
雑家類		128.7 又は 042
類書類		032.2
小説家類（含通俗小説）		923.3～.7
*釈家類		180～188
道家類		126.2～.8又は166.1～.8
集部		
楚詞類		921.3
別集類	詩人又は詩集	921.3～.7
	主に散文	042
	儒者	125.1～.7
総集類	詩又は詩文	921.3～.7
	尺牘	926.3～.7
	散文	042
	儒者	125.1～.7
詩文評類		920.1 又は
詩評又は詩文評		921.3～.7
文評		826.5
四庫提要の分類にないもの。		
戯曲		922.3～.7
叢書		
経叢		123.08
雑叢		082.1
景仿		082.2
輯佚		082.3
郡邑		082.4

*釈家類については，大正蔵経の分類との比較を，後に報告する予定である。

尚，相当する番号に所蔵図書がない場合もありえるので，あらかじめ御承知おき願いたい。

館員　山内四郎

しごと



図書館の整理作業

資料（図書・紀要・フィルム等）を、利用しやすいように整理・整頓すること。ひらたくいうと、これが図書館の整理です。

私達の用語では〝資料の組織化〟といい、請求記号の決定と共に、著者・書名・主題のいずれからも検索できるように、カード上で資料を組織するのが主な役割です。

冊子の増加図書目録は、この一連の作業にもとづいており、月刊の速報と年報あいまって閲覧者の便をはかるものです。

摘用されるトゥールは、分類：N・D・C、目録：A・L・AとL・C、件名：N・S・H、編成は、Akersの簡略目録法に準拠しており、その他各担当者が、業務用のコード（＝内規）を作成していきます。

作業にあたっては、人名地名辞典、各種便覧・年表などのレファレンス・ブックを必要とし、このレファレンス・ブックの利用と共に、日常の学習活動がこの作業をささえています。

公的な学習活動としては、私立大学図書館協会・研究部会への参加があり、月に一度、各担当者が出席しています。

現在、参加しているのは、分類・目録・編成・書誌（整理作業関係）の四つです。

図書館職員
村田　基宏